関東甲信越建築士会ブロック会
青年建築士協議会

かながわ箱根大会

総括

本大会は、6 月 22･23･24 日の三日間、湯本富士屋ホテル（神奈川県箱根町）にて行われました。遡ること 1977 年、神奈川県鎌倉市（鎌倉パークホテル）で関ブロ青年協が発足しました。それから 40 年という節目に過去から未来へと連綿と続く「今」を背景に、これからの「継（つなぐ）」をテーマに行われました。各都県より多くの大会登録をして頂き、近年最多の約 700 名の参加者が集い、盛大に大会が行われました。

無事に終わりましたこと、ご協力頂いた皆様には感謝申し上げます。来年は栃木県で行われます。是非参加下さい。

青年委員会委員長・大会実行委員会委員長より

大会実行委員会委員長
青年委員会委員長
伊藤誠一

平成 29 年度 6 月に開催した関東甲信越建築士会ブロック会青年建築士協議会『かながわ箱根大会』では、1 都 9 県を含め全国から多くの方々にご参加、ご協力をいただきまして大変ありがとうございました。かながわ箱根大会では『継』をテーマに行い、『人を継』『価値を継』『未来を継』このことを参加した多くの仲間達が共有し各地域に持ち帰ることが出来たのではないかと思います。

この、かながわ箱根大会が大成功に終えられたのはオール神奈川の体制で大会に臨めた結果だと考えています。次に神奈川大会が開催されるのは 10 年後となりますが、本会、各支部を含めご協力頂いた多くの方々がこのような活動からお互いに学び情報を共有しながら次の世代へ継ぐことができたのではないでしょうか。

準備を含め約1年半、実行委員長を務めさせて頂きましたが、本当に皆様のご協力があってこその大会の成功と考えています。本当にご協力を頂いた皆様には感謝申し上げます。

関ブロ青年協理事
前青年委員会委員長
奈良直史

本大会では、青年委員会と女性委員会合同の「実行委員会」に、県内各支部からの応援を合わせて121名。加えて39の協賛企業・団体のみなさまにお支え頂きました。
大会テーマを「継（つなぐ）」と掲げ、私たちと御縁をいただいたすべての方、誰一人が欠けても成立しないと意気込み、当日を迎え、不手際等についてはご容赦賜りたくお願いしつつ、この10年を振り返って、もっとも盛大な大会を開催でき、関東甲信越ブロックを始め、北は青森、南は山口、愛媛と多くの青年建築士をお迎えできましたこと、本会会員の皆様のご支援とご愛顧によるものと、心から感謝と御礼申し上げます。

結びに、この大会の開催をもちまして、4年間お預かりした青年委員長の役職をお返しすることと相成りました。これまで頂戴いたしました皆様からのご厚誼に際し、心より感謝と御礼を申し上げ、今後の建築士会活動に「継（つなげて）」参りたく存じます。ありがとうございました。

第一分科会Ⅰ：『過去から未来へつなぐ「今」』　（地域実践活動発表会）

地域実践活動の発表

第一分科会は、一昨年前の群馬大会から採用になった、発表とディスカッションの二部構成にて開催されました。審査方法についても同様に、第一部で10 都県の発表を大会参加者全員で聞き、その参加者の投票により最優秀賞と優秀賞を選出するという方式で行われました。

発表内容は、分科会のテーマである『過去から未来へつなぐ「今」』を意識した、ワークショップやまちづくり活動、・他団体や地域との交流や、次世代の育成へ継がる活動など、多岐にわたっており、各都県の今後の活動の広がりに期待をしています。

また、各都県の発表者は、最高のパフォーマンスをするべく、熱のこもったプレゼンでした。そして、大会の目的である『持ち寄って、持ち帰る。』のため、参加者たちも長時間にわたり真剣に発表を聞き入っていました。有意義な大会となりました。

神奈川県からは

昨年の活動交流会で神奈川県代表として選出された防災委員会と女性委員会で「つどう・つくる・つながる・ひろがる・そして・、支え合う」と題し、平成24 年度より共に活動し、様々な地域で行っている避難所運営ゲーム「HUG」について発表しました。

神奈川の発表者（左：内田幸夫、右：横山夕岐子）▲

第一分科会Ⅰ会場の様子 ▲

審査結果

【最優秀賞】（長野県　荒木貴志）
風穴のある場所の価値～地域と共に未来へ継ぐ～
【優秀賞】（新潟県　小林龍一）
未来の建築士を育てる建築士会活動
【審査員特別賞】（山梨県　尾曲章）
「伝統継承・上棟式で地域活動」

なお、最優秀賞に選ばれた長野県は、12 月に京都で開催される全国大会にて発表を行うことになっています。

（記事：青年委員　村山勉・田中良明）

第一分科会Ⅱ：第一分科会 Ⅰ の発表者との意見交換会

テーブルディスカッション

第一分科会Ⅱは、第一分科会Ⅰでの10都県別に分かれて、各発表に基づいたテーブルディスカッションを行いました。私は司会を担当しておりましたので、会全体を見させて頂くことが出来ました。

テーブルディスカッションは、2部構成となっており、参加された方々が興味のある題目の都県のテーブルに着座します。今回、第一分科会Ⅱは、「赤富士」という和室の大広間で行ったため、参加者は、靴を抜いで、リラックスした状態で、意見交換等を行うことが出来たように見えました。

会場全体の様子 ▲

全体を見てみると、第一分科会Ⅰの発表で、多くの方が特に聞き入っていた都県には人気があり、積極的に参加されている様子が窺えました。

HUG・クロスロードの実践

神奈川県は、防災に関するHUGやクロスロードの体験を行いました。防災は、地域が違えどどの地域でも必要となります。参加された方々が、自分の立場や地域に置き換えて考え、意見されている様子は、自県として大変嬉しく感じました。

他都県の方が混在するディスカッションは、貴重な体験となったことと感じます。自県に持ち帰り、今後の活動につなげて頂けることを期待致します。

（記事：女性委員会　横山夕岐子）

神奈川県テーブルの様子 ▲

神奈川県HUG体験の様子 ▲

第二分科会：「2050 年まで、住み継ぐ住まい」～ 続・今、この地に建つ住まいとは～

提案紹介の様子（発表者：三和舞子） ▲

全体の流れ

まずは、各都県より「30 年後も、この地に建つ住まいとは？！」をテーマに自分たちの未来予想図を提案して頂きました。その後、メインアドバイザー兼 講評者の山本理顕氏の VTR を視聴して、テーブルディスカッションが行われました。

白熱した議論に

共通性のある提案毎に3つのテーブルに分かれてテーブルディスカッションを行いました。30 年後を見据え、当日答えを出すのではなく、各都県の提案やディスカッションから各自が持ち帰り、今後、何を考え、行動していくのかを考える分科会であったため、年代や実務経験の違いにより、異なった感じ方、捉え方が生じました。そのため、様々な議論が繰り広げられ白熱したディスカッションとなりました。

会場に展示したパネルをじっくりと読み込む方々も多く、もっと議論したかったという意見が出るほどでした。

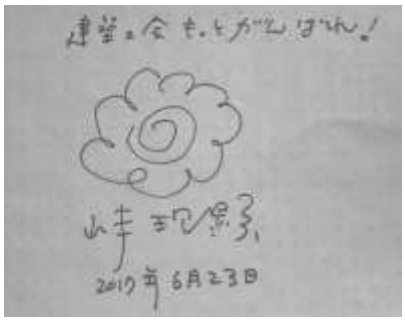
テーブルディスカッションの様子▲

再発見、そして・・・

青年委員会だけでなく、青年委員会 OB との交流の場にもなりました。また、青年委員会と女性委員会のお互いの良さがシナジーとなり発揮され、神奈川のポテンシャルの高さを再発見することができました。

なお、次回開催予定は 10 年後なので、今のネットワークを継承し、同じテーマで第二分科会を開催して欲しいものです。そして、サイは投げられたのです。

（記事：青年委員 田中良明）



山本理顕氏からのメッセージ▲

第三分科会：「今、動き出そう！まちの未来と青年建築士を継ぐ」

箱根の夜は熱く語りき・・・

福祉部会で地道に活動している私は、「今、動き出そう！まちの未来と青年建築士を継ぐ」というテーマの第三分科会に参加しました。

地域包括ケアシステムと福祉に携わるこれからの建築士の役目など、三人の講師からそれぞれの視点での発表があり、これからの時代は福祉に対して理解する事と、それに伴う計画・施工が出来る建築士が必須と感じました。

5年前に脳幹出血を経験しそれから福祉に目覚めた私は、建築士が行うべき事はもっとたくさんあると日々感じているので、最後の質疑応答で挙手をしました。その時は、限られた時間の中だったので物足りず、夜の大懇親会で講師の方々を探しました。そして、愛知県建築士会の竹中講師と千葉県建築士会の増田講師、一緒に参加した熊澤福祉部会長と私の4人は、会場外の静かなロビーへこっそり抜け出し、これからの福祉建築について大いに熱く語り合いました。

他県にも同じ様に活動している方々がいると知り、何をやっているのか分からないと思われがちな私達福祉部会が行っている事はとても意義があり、私が目指している方向も間違っていないと確信出来た夜でした。

今年度からは、福祉まちづくり地域リーダーも拝命しておりますので、この熱い気持ちをたくさんの人に伝えられる様、今後も研鑽していこうと思います。

（記事：福祉部会 松田典子）

士会連合会副会長 山中保教氏の挨拶 ▲

当日の様子と登壇者 ▲
（左より竹内美智子、城田幸子、増田敬之）

卒業設計等合同講評会

講評会の様子▲

作品のパネルを展示 ▲

関ブロ青年協大会初の試み

卒業設計等合同講評会は、神奈川県内の卒業設計作品の展示と併せ、建築士会連合会が毎年開催している「建築甲子園」の作品展示を平行して実施いたしました。この企画は神奈川士会の企画として、関ブロ青年協大会では初の試みでした。まず一つは、建築を志す学生の作品がプロの視線で実践的な講評を得ること、次に、建築を学ぶ多感な若者たちが、建築や“まちづくり“に対して何を考え、表現するのかを青年建築士たちが感じ、我々が次代を考えるきっかけとして開催いたしました。

作品と講評会

講評者は本会の金子修司会長、平成28年度神奈川建築コンクールで特別賞を受賞された鈴木信弘さん、建築家の青木恵美子さん、関ブロ青年協より群馬建築士会の島崎重徳さんの4名です。

専門学校の作品は、実務を意識された建物の作品であり、建築設計のプロセスも伝わってくるものでした。建築甲子園の出場作は、課題が「空き家対策」であったことから、建物単体というよりは、“まちづくり”を意識した作品が多いのが特徴でした。

講評結果

一つの作品に対して 10 分程度、講評者により建物に対するものと、まちづくりに対する熱い講評が繰り広げられ、それぞれの講評者が一作品を選び講評者の名を冠した賞を贈りました。

【金子修司賞】 桐生工業高校(群馬県)
【鈴木信弘賞】 市川工業高校(千葉県)
【青木恵美子賞】 新潟工業高校(新潟県)
【島崎重徳賞】 浅野工業専門学校
石井翔太さん・森屋柴さん

(記事:島崎重徳・群馬建築士会／青年委員・奈良直史)

エクスカーション

6 月 24 日は、2 コースに分かれエクスカーションを実施しました。

A コース

箱根の歴史を支えてきた「富士屋ホテル・菊華荘・宮ノ下」

大会テーマ「継」に相応しく、明治 11 年(1878 年)に誕生した日本で初めての本格的リゾートホテル「富士屋ホテル」と宮ノ下町を巡るコースに 20 名様のご参加をいただきました。

初夏の箱根を満喫できる箱根登山鉄道に乗り、紫陽花をみながら宮ノ下駅へ。ホテル見学会では通常入ることのできない披露宴会場や客室など案内して頂き、解説してくださった社員さんは満面の笑みでホテルの歴史を語ってくれたことが印象的でした。

また「箱根町郷土資料館」鈴木館長より『箱根観光と歴史的建造物』についての講演会を行い、『菊華荘』での食事会、午後は宮ノ下町を散策しました。骨董屋さん、郵便局をリノベーションした民泊施設、パン屋さん、寄木細工のお店などを巡り、買い物もできて、皆さんに喜んでいただきました。

(記事:青年委員 金城起弘)

富士屋ホテルにて記念撮影 ▲

B コース

「受け継がれる歴史・自然と建築を肌で感じる」

元気になった箱根の魅力を皆に伝えたい！そんな思いからコースを作りました。天候にも恵まれ総勢 21 名で箱根を巡りました。

箱根神社をスタートし、大涌谷から強羅へ。ロープーウェイから見る大涌谷の噴煙立上る光景はまさに大迫力でした。神奈川県温泉地学研究所の萬年研究員による講演会では箱根エリア温泉の種類と温泉が出来るまでの仕組み、火山と温泉の密接な関係などを解説頂きました。当日お手伝い頂いた小田原地方支部の方々は案内も詳しく感謝の気持ちで一杯です。

(記事:青年委員 新木聡美・山田夏江)

大涌谷にて記念撮影 ▲

大会の記録

事前準備

大会直前は連日の打合せ ▲

前日の会場設営の様子 ▲

前日から会場で作業 ▲

大会当日

当日の朝礼 ▲

大会参加者を迎える受付準備 ▲

これから会場案内 ▲

懇親会

鏡割り ▲

舞妓の余興 ▲

ステージにて神奈川の PR と各都県へお礼 ▲

皆が一丸となったかながわ箱根大会、全体会議終了後に記念撮影 ▲

支部・委員会活動報告

湘南支部　茅ヶ崎海岸で地引網

湘南支部情報委員会

湘南支部の「地引網大会」は７月８日（土）茅ヶ崎海岸のカネサ網で開催され、今年は大人 91 人、子ども 46 人が参加。当支部会員のほかに他支部、本会役員も参加し、家族連れの参加もあり、アットホームな雰囲気の地引網大会は、夏の恒例行事となっています。会員のご家族から寄せられた感想文を紹介します。

地引網大会に参加して　瀬川　千穂

先日は楽しい地引網大会に参加することができ、ありがとうございました。昨年はとても楽しみにしていたのですが、雨で中止となり、今年は数日前から指折り数えて子どもたちは楽しみにしておりました。茅ヶ崎に住んでいるので海にはよく遊びに行きますが、この海にいる魚を見たり食べたりする事はなかなか無いので地引網があがってくると、どんな魚がとれるのかと、子どもたちは、とても興味深く見て声を出していました。また、息子は「ビーサン飛ばしゲーム」、娘は「宝さがしゲーム」がとても楽しかったと話していました。ゲームがあると子ども達は、遊びがより一層楽しく遊べる様で、まわりのお子さん達とも仲良くなり、とても良かったです。また、わが家の手作りポップコーンを持参し、皆さんに配るお手伝いを子ども達にさせた時、「ありがとう」とか「ポップコーン下さい」などと声をかけられた事が、うれしかったと話していました。地引網大会の準備をしていただいた関係者の皆様、参加された皆様ありがとうございました。

漁師さんの掛け声で網を引く

川崎支部　バスツアー

『日光へ陽明門を見に行っこう』

前島　浩吉

川崎支部毎年恒例のバスツアーに参加してきました。今年３月に改修工事が終わったばかりの日光東照宮の陽明門を見に行くタイムリーな企画です。まず、目的地へ向かうバスの車中では川崎支部の富澤さんによる日光東照宮の空間構成に関する解説がありました。日光東照宮の創建、造営について。神が居るような気配を感じる配置計画についての説明など大変興味深い内容でした。最初の目的地は大谷資料館。大谷石の採掘場跡で、最深部地下60m、広さ２万平米、平均気温８度という幻想的な地下大空間を体験してきました。大谷石は近年、資源はあるが需要が無い状況で、小物などの加工品に力を入れているそうです。続いては、昼食です。金谷ホテル歴史館に隣接する金谷ホテルベーカリー・カッテッジインにてビーフシチューと焼き立てパンを堪能しました。金谷ホテル歴史館は今回見ることができず残念でしたが、江戸時代の武家屋敷で金谷ホテルの前身となる建物だそうです。昼食後は、いよいよ日光東照宮です。陽明門の色鮮やかによみがえった彫刻はやはり素晴らしかったです。また、今回は車中での解説をふまえての見学で一段と楽しむことができました。最後は造り酒屋の渡邊佐平商店の酒蔵見学と試飲を楽しみ、お土産の日本酒を購入して帰途につきました。帰りのバスは参加者の皆さんと日本酒を飲みながら楽しく交流、情報交換させていただきました。盛りだくさんのツアー企画また来年も楽しみにしています。

大谷資料館

東照宮にて集合写真

支部・委員会活動報告

県庁職域支部　建築セミナー
「神奈川県立歴史博物館（旧横浜正金銀行）の魅力」に参加して

榊原　亜紀子

空調等改修工事中のため、普段見ることが出来ない躯体の見学が可能ということで、セミナーに参加しました。関東大震災、戦争に耐え、明治の本格的な洋風煉瓦造建築の代表として重要文化財に指定されている歴史博物館（旧横浜正金銀行）は、現在でも圧倒的な存在感があります。

明治 37 年竣工の旧横浜正金銀行（設計：妻木頼黄）と明治 29 年竣工の日本銀行本店本館（設計：辰野金吾）の仕様には多くの共通点があり、その背景には両建物の設計者の関係が影響していることをはじめて知り、とても興味深く感じました。

関東大震災では、本震後、付近に火災が発生し、1 階以上の内部は全部焼け落ちましたが、地下室に避難した約 340 名の命を守ったという建物の歴史も知ることができ、大変感銘を受けました。

威厳のある外観の中でも、昭和 42 年に博物館として改修した際に復元されたドームは、今では屋根の銅板が緑青色となり、建物の象徴的な存在となっています。外観とは対象的に、内部は、漆喰の天井や、金庫室の白釉耐火煉瓦仕上げの壁面など、しっとりとした女性的な感じがしました。

また、梁の躯体には、建築当時の職人が書いたと思われる文字があり、詳細はまだ解明されていないようですが、これからも新しい発見がありそうです。
今後も大切に建物が利用されていくことを願い、魅力を増していく経過を楽しみたいと思います。

旧横浜正金銀行のドームとセミナー風景

スクランブル調査隊部会
江戸東京たてもの園ツアー

角　栄子

スクランブル調査隊の企画で7月2日に江戸東京たてもの園で開催中の特別展「ル・コルビュジエと前川國男」に行ってきました。これはコルビュジエの国立西洋美術館が世界遺産登録された記念行事で、東京文化会館、東京都美術館と 3 館合同で開催されている展覧会の 1 つになります。(9 月 10 日まで) この日はシンポジウム「ル・コルビュジエと前川國男、日本のモダニズム」も開かれ、登壇者は藤森照信氏、山名善之氏、進行の米山勇氏（江戸東京博物館研究員）の方々でした。午前中は園内に移築された建物や特別展を見る予定で、まずは前川國男邸へ。外観の大きな切妻と開口部の印象はそのままリビングの空間となっていました。開口をすっかり開け放つため、雨戸を戸袋ごと 90 度外へ回転させるオペレーションや大きな一枚扉を軸をずらして回転させたり、雪見障子を逆さまに使ったような建具など、またキッチン廻りでもその工夫が納得でき魅力が沢山見つかる建物でした。

旧前川國男自邸

前川國男邸で時間を使い過ぎ、それでも欲張って他の建物や展示も駆け足で見学し、内部をカフェに活用しているデ・ラランデ邸で昼食。午後はビジターセンターでシンポジウムに参加しました。山名さんと米山さんが事前に決めておいた 6 テーマに沿って発表され、それに藤森さんを含めてお互いコメントし合う形で進みました。テーマは来日した外国人建築家とル・コルビュジエ、ル・コルビュジエ作品ベスト 1、前川國男作品ベスト 3 など。それぞれに豊富な知識を持たれる歴史研究者ですから大変楽しいやり取りでした。企画に参加する事ができとても有意義な時間でした。

支部・委員会活動報告　　技術支援委員会

◆委員長から一言◆　　（村島　正章）

委員会は新しい体制になりましたが、４つの部会はそれぞれのテーマを掲げて、楽しく、アカデミックに活動し、会員増強につながることを期待しています。こんな講習会・研修会をやってほしいということがありましたら是非お知らせ下さい。

■子どもの生活環境部会　　（関口 佐代子）

6 月 10 日(土)横浜市の黄金町高架下スタジオ Site-D 集会場で、子ども部会カフェ～2016 年度子ども部会活動報告・交流カフェ～を開催しました。

当日は報告会開始１時間前から、親子で楽しめる工作・体験コーナーを開催し、おとなも子どもも多くの方に参加して頂き、楽しんで頂くことができました。

その中の構造模型コーナーでは、関東学院大学の神戸先生による地震の時に強い家を考える体験が好評でした。筋交いをどこに入れるか、どう入れるかで、その効果を模型を揺らして確かめるという、子どもにも印象に残る楽しいワークショップでした。

15 時からの子ども部会カフェには、建築士会員をはじめ、他県の建築士の方、小学校や大学の先生・学生の方々、子ども部会のワークショップにスタッフ参加してくれていた元学生スタッフ OBOG、興味を持って遠方から来てくださった方々など、約 50 名にお集まりいただくことが出来ました。

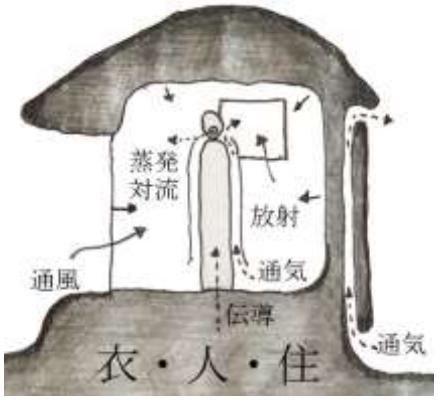
昨年度の活動報告では、夏休みの学童クラブでの「木を知ろう!木でつくろう！」ワークショップ、ふじさわ宿交流館でのまち歩き、文化庁伝統文化親子教室事業への講師協力などをご紹介しました。交流の部では、会場となった黄金町エリアのマネージメントセンターの方から、この地域のまちづくりについてお聞きしたり、神奈川県の造形教育に関わる方のお話、構造模型の作者である神戸先生のお話や、福井県で活動されている方、建築学会で活動されている方等多くの方とお話することが出来ました。子ども部会では、夏休みに子どもワークショップを開催しました。12 月には、藤沢宿のまち探検を企画しています。ご興味ある方はスタッフ参加してみませんか？詳細は子ども部会 HP をご覧ください。

http://www.kanagawa-kentikusikai.com/iinkai/gijutsu/kodomo/

■建築環境部会　　（加藤　哲也）

6 月 20 日 YKK AP 体感ショールーム（品川）で開催された「省エネ基準　断熱性能・体験見学会」の報告です。

「感境」という造語をつくり、そのことばの意味するところを掘り下げる作業を、ここ数年の部会の活動の中心としてきた。建築の内と外の境にあるものは壁。人間ならば皮膚。むかしから衣服は第 2 の皮膚で、建築は第 3 の皮膚と言われてきた。第 1 の皮膚のなかには血管や神経や筋肉、いろいろな器官が入っている。その器官の能力を人は感覚という感じとる力によって意識する。形にはすべて境界が存在する。その境界のありかたが、その形を特徴づける大きな要因ともなる。第 3 の皮膚に第 1 の皮膚のなかに備わっている器官に対応するものはあるのだろうか？あるとすれば、それはなんだろうか？そんなことを考えながら YKK AP 体感ショールームに行ってみた。ここでは、窓を遮熱・遮音・断熱、この 3 つの視点で過去から現在までの性能の変化を 10 を越える実物展示で比較・体感できる。サッシ枠はアルミ単体、アルミと樹脂、樹脂単体へ。ガラスはシングルからダブル（複層）、Low-E、ガス封入、トリプルへと変わり、この枠とガラスの組合せで、熱貫流率（W/(㎡・K)）の数値でいえば 6.51 から 0.89 までの変化を、見て、触れて、体感できる。さらには、サンプルルームが用意され、そのサッシの性能が室内環境にどのくらい影響するのかを、身体全体で感じとれるようになっている。その日は外気側を 1.7℃に設定、室温はエアコンの設定を 22℃にセットされ、昭和 55 年頃の仕様、2020 年省エネ基準をクリアする仕様、ZEH(ゼロ・エネルギー・ハウス)仕様、この 3 つの部屋を体感することができた。それぞれの部屋に無暖房室が併設されており、持参した放射温度計でそのガラス面の温度を測ると、昭和 55 年の頃の仕様でできた部屋の窓ガラスの表面温度が 7.5℃であったのに対して、ZEH 仕様では 16.6℃であった。建築の温熱環境を考える時、その断熱の効果を発揮させるためには、開口部がある一定の能力を保持していないと、断熱材の能力を発揮することができないということも、このサンプルルームで実感することができた。家が感覚を備えているとしたら、開口部をそれに反応する器官のひとつとみてみる。そうしたときに、建築の姿はどうなっていくのだろうか？そんなことを想像できる展示もあった。



景観まちづくりフォーラム　景観整備機構委員会

景観まちづくり実践活動と地域貢献活動の報告会およびシンポジウムに参加して

小野　綾子

平成 29 年 7 月 9 日（日）に開催された「景観まちづくりフォーラム」に参加しました。神奈川県建築士会（および関係する団体）の中には歴史的建造物の保存やまちなみ形成活動、まちづくり活動を行っている多様な方々がおり、その活動についての報告会とシンポジウムが行われました。報告会はただ活動を紹介するのみではなく、まちづくりや保存についての具体的な方法論や、様々なエピソードを話してくれる大変興味深い内容でした。

まずはスクランブル調査隊の前隊長の森山恒夫さんからは、登録有形文化財建造物制度の利用方法、登録準備の手法など詳細に語っていただきました。

旧東海道藤沢宿まちそだて隊の湯本敦さんからは、藤沢宿の回遊性を高めるまちづくり活動について。「藤沢宿」という大変立派な資料をまとめ上げ、当日参加者に配布頂きましたが素晴らしい資料でした。まちづくりの手法、回遊性のある町歩きのコース選定の内容、地元との連携についてなど、具体的な活動の報告はとても参考になりました。

2017 年２月刊行の冊子『藤沢宿』

本フォーラム主催者である景観整備機構委員会の委員長長瀬光市さんからは、江の島のまちなみ形成と建築士の係わりについて、報告がありました。観光経済陳腐化による老舗旅館の倒産や景観破壊の開発等により、江の島がゴミの島と言われるようになるほどの問題を抱えていたそうです。「歴史と文化と緑の江の島」を取り戻したいと、住民と建築士が連携してまちなみ景観を創出した内容は、まちづくりの成功例として参考になるお話でした。

次に地域貢献部会長の飯田正典さんからは、地域貢献活動支援により育ってきた活動の活性化について。平成 15 年からの地域貢献活動センターの内容と実状について語っていただきました。

ヘリテージマネージャー協会副会長の内田美知留さんからは、『ヘリテージマネージャーの育成と活動の活性化に向けて』をお話しいただきました。かながわヘリテージマネージャー協会が発足されてからの活動内容と、発足前の文化財ドクターやヘリマネ養成についてご紹介いただきました。

景観整備機構委員・川崎支部の赤川真理さんからは、景観整備機構による川崎のまちづくり支援活動についてのお話です。景観整備機構とは“景観法に基づいて、一定の景観の保全・整備能力を有する公益法人または NPO について景観行政団体の長が指定する”もので、川崎市から神奈川県建築士会（川崎支部）が 4 年前から指定を受けています。市民の方に景観についての概要や制度を知ってもらうにはどうしたら良いかとイベント等を通して働きかけています。

以上の報告会（一部）だけでも大変濃い内容でしたが、二部以降は参加者全員が 5 グループに分かれてのテーブルディスカッションが行われ、様々な意見交換や疑問点を話すことができました。最後に全体ディスカッションでその内容が発表され、それに対して質疑応答形式での回答も参考になり、とても有意義なフォーラムでした。ありがとうございました。

各グループの内容が発表された全体ディスカッション

◆◆◆　開館 100 周年を迎えた横浜市開港記念会館 ◆◆◆

神奈川県庁本庁舎（キングの塔）、横浜税関（クイーンの塔）と並ぶ横浜三塔の一つ、横浜市開港記念会館（ジャックの塔）が本年 7 月に開館 100 年を迎えました。

1917 年（大正 6）に開館した横浜市開港記念会館は、1989 年（平成元）に国の重要文化財の指定を、また 2007 年（平成 19）には国の近代化産業遺産の指定を受け、今なお現役の公会堂として横浜市民の方々に広く利用されています。

本稿ではこの開設 100 周年を迎えた横浜市開港記念会館の設計者とこれまでの歩みについて紹介いたします。

同会館は、横浜開港（1859 年（安政 6）6 月 2 日）50 周年を記念し、市民の寄付により 1917 年（大正 6）7 月 1 日、当時は『開港記念横浜会館』として開館しました。

同会館の場所は、その昔「時計台」として親しまれた「町会所」（1875 年（明治 7）竣工、1907 年（明治 39）年焼失、設計：ブリシェンス）が建っていた場所です。同会館の設計にあたっては、横浜で初の公開建築競技（コンペ）が実施されました。その結果、旧町会所の時計台のイメージを継承した意匠の、東京市の技師・福田重義の案が当選しています。実施設計にあたっては、この福田重義の案を活かし、横浜市の初代建築課長（在職 1914（大正 3）-1929（昭和 4））山田七五郎（1871-1945）を中心に、当時の横浜市建築課のスタッフがあたっています。同会館の建築様式は、赤煉瓦に花崗岩をとりまぜた、東京駅などに見られる、いわゆる「辰野式フリークラシック」であり、当時の横浜市役所営繕部局の力量を充分に示した建築物といえます。

なお、山田七五郎は、横浜市在職中の 1925 年（昭和元）にパリで開催された現代装飾美術・産業美術国際博覧会（アールデコ博）において日本館の設計を担当した建築家としても知られています。横浜市退職後は、横浜高等工業高校（現・横浜国立大学工学部）の講師を務めました。

1923 年（大正 12）の関東大震災によって、会館は時計塔と壁体だけを残して焼失し、屋根ドーム群も崩壊してしまいました。その後行われた震災復旧工事が 1927 年（昭和 2）に竣工、ステンドグラスも含めて大正末期のインテリア空間をそのまま継承して復旧しています。ステンドグラスの製作は、宇野沢組ステンドグラス製作所、当初のステンドグラスの意匠をベースに復旧しています。なお、屋根ドーム群の復元は 1989 年（平成元）まで待つことになります。

1945 年（昭和 20）の横浜大空襲を経て、同会館

は終戦後 1945 年から 1958 年（昭和 33）まで米軍に接収されます。接収当時は進駐軍向けの映画上映館、「メモリアルホール」として利用されました。

1959 年（昭和 34）に米軍の接収が解除され、横浜市に返還された同会館は、「横浜市開港記念会館」（中区公会堂）として新たな歩みを始めます。

その後 1985 年（昭和 60）に創建時の設計図が見つかったことを契機に、「ドーム復元調査委員会（委員長：村松貞次郎・東京大学名誉教授）」が組織され、本格的なドーム復元調査を行っています。この委員会の調査結果と提言を経て、開港 130 周年の 1989 年（平成元）6 月 16 日にドーム群を復元し、開館当時の姿を取り戻しています。

（文責：SALON 編集部　小笠原 泉）